毎日新聞　2014年2月13日（木）夕刊　〔第3種郵便物認可〕

正邪善悪、誰が決める

前進座 討たれる側から忠臣蔵描く「薄桜記」

15日から文楽劇場 梅之助、吉良役で復帰

赤穂浪士の「忠臣蔵」の世界を、敵討ちされる吉良側についた武士の姿を通して描く小説「薄桜記」が前進座の手で舞台化され、15～24日、大阪・国立文楽劇場で上演される。けがのため昨春から療養していた劇団代表の中村梅之助が、初の吉良上野介役で復帰するのも話題だ。

「柳生武芸帳」などの剣豪小説で知られた五味康祐（1921～80）の作。一昨年にNHKでドラマ化され、再び注目された。ドラマの脚本を手掛けたジェームス三木が、今回の舞台でも脚本・演出を担当する。

旗本の丹下典膳は一刀流の名手。上杉家家老の娘・千春を妻にするが、千春は幼なじみに陵辱される。妻の名誉を守った上で離縁を申し出た典膳だが、逆上した義兄に片腕を切り落とされ、負傷した情けなさをとがめられ家名断絶となる。同じ頃、江戸城で刃傷に及んだ赤穂藩の浅野内匠頭が切腹となり、赤穂浪士が主君の敵の吉良を狙っているとうわさが立つ。浪人となった典膳は、恩義ある人の願いで、上野介の警護につく――。

典膳には嵐芳三郎。「運命を受け入れた上で武士道を貫く。ニヒルな役で、僕には大挑戦です。感情を表に出さなくても、ひしひしと伝わる男を演じたい」と話す。典膳を愛し続ける千春に浜名実貴。「りんとした愛情深い千春になりたい」と言う。ここに絡むのが典膳の道場仲間の中山安兵衛（のちの堀部安兵衛）。安兵衛は典膳と厚い友情で結ばれるが、やがて浅野家の家臣となり、典膳と敵対する立場になってしまう。安兵衛役の中嶋宏太郎は「典膳とは対照的に、明るく活動的に演じたい」と意気込む。

舞台中の上野介が、風雅を愛し、情を理解する人物として描かれるのも面白い。演じる梅之助は、吉良の領地があった愛知県の三河地方に、馬に乗って領内を見回る上野介をたたえた玩具「吉良の赤馬」があるのを知り、「上野介にも何かしらいいところがあったのでは」と話す。「物語は一面的に描くものではなく、一人一人がどう生きたかを描くものです」と、初めて挑む役どころに意欲を燃やす。

「書く行為の根源は『疑う』こと」と脚本の三木。「この芝居には、人の正邪善悪を決めるのは一体誰なのかという問いを込めました」。複眼的な視点のある剣豪のドラマに興味が深まる。

9000円、6500円。前進座大阪営業所（06・6631・3273）。【畑律江】

前進座「薄桜記」の（手前左から反時計回りに）脚本・演出のジェームス三木、中村梅之助、浜名実貴、主演の嵐芳三郎、中嶋宏太郎＝東京・吉祥寺で

「薄桜記」の登場人物たち。中央が丹下典膳（芳三郎）、右は千春（浜名）、左が中山安兵衛（中嶋）